9 日雲神社本殿　国登録文化財　信楽町牧

三間社流造　檜皮葺

江戸時代　元禄四（一六九一）年

日雲神社は牧集落の東側の山麓に鎮座する。近世は「上野山天神」として牧・宮町・黄瀬三カ村を氏子としたが、文政五（一八二二）年に牧一カ村の氏神社となり、明治十八（一八八五）年に日雲神社と改称された。神道五部書の一である『倭姫命世紀』に見える倭姫命（垂仁天皇の皇女）が滞在した淡海日雲宮を当社とする由緒にちなむ。

写494　日雲神社本殿

社頭から杉木立の長い参道を進み信楽高原鐵道の線路を越え石段を昇ると、正面に三間×三間、軒唐破風付銅板葺の妻入りの拝殿がある。

本殿はその奥の一段高い平坦地の玉垣内に西面して建っている。末社はいずれも一間社流造や見世棚造で、境内には八幡神社・春日神社・雨宮神社及び厳島神社があり、飛び地境内には鹿島神社を祀る。

本殿は、間口一四・二尺（約四・三メートル）余りの中規模な三間社流造である。身舎は桁行三間、梁間二間で、その前面に梁間一間の庇を付け前室とし、さらに孫庇を付け向拝とする。屋根は現在銅板葺であるが、以前は檜皮葺である。身舎は円柱で、庇は大面取り角柱とし頭貫を入れ海老虹梁で繋ぐ。柱上組物は出三斗、中備は正面中央間に蟇股を入れる。軒は二軒繁垂木、妻飾りは虹梁上に大瓶束笈形付きとする。

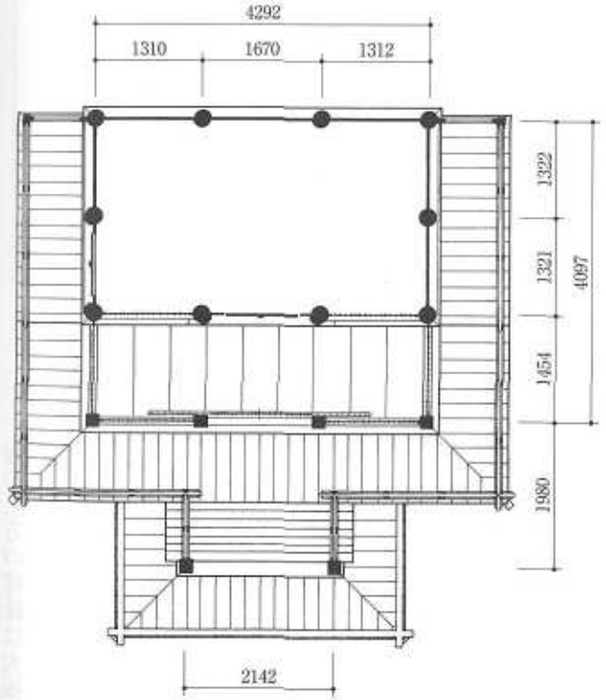

図43　日雲神社本殿平面図

柱間装置は正面中央間と左側面前間は板扉構え、その他は横嵌板とする。庇（前室）は正面中央間は菱格子戸を引き分け（もとは引違い）、その他は中敷居上に菱格子戸を嵌め殺す。腰長押と切目長押を三方に廻し、蹴込に格狭間を嵌める。正面と両側面の三方に設ける切目縁は、前室が一段低くなり跳高欄を付ける。

一間の孫庇は大面取り角柱に象鼻付虹梁形頭貫を入れ、柱上組物は連三斗で中備に蟇股を入れる。正面に浜床と階段を設け登高欄を付ける。

この本殿は江戸時代中期の元禄四（一六九一）年の建築と伝える。妻飾りや孫庇の虹梁形頭貫の絵様および組物などから判断してその頃の建築であろうが、肘木に笹繰りがあり、手挟は上半部にのみ植物を彫るなど、中世の雰囲気をよく残している。前室付きの流造本殿としてよくまとまっており、中世以来の滋賀の流造本殿の伝統もよく伝えている。

なお、三間社流造本殿は、滋賀県内の重要文化財に一五棟あり、そのうち一四棟が前室付きである。またその分布は京都府・瀬戸内海筋・東海と北陸の一部に限られる。

10 八坂神社本殿　国登録文化財　信楽町柞原

一間社流造　檜皮葺

江戸時代　貞享五（一六八八）年

八坂神社は柞原集落の南西方向、旧道北側の山麓に鎮座する。神社はもと杉山・中野・柞原・畑及び田代の産土神として畑の宮原に鎮座していたが、正応年間（一二八八～九三）に信楽庄の領主関白近衛家基により現在地に移されたといい、その後、天文元（一五三二）年に新たに社殿が造営され、現在に至ると伝える。

社頭の石鳥居から一直線に伸びる並木の参道を進むと、正面に三間×三間、入母屋造、銅板葺、妻入りの拝殿がある。その左側に手水舎、右側にはごく近年の建築である八王子宮の小社が並ぶ。その奥は一段高く石垣を積んで平坦地にし、本殿は中央の覆屋内にある。

写495　八坂神社本殿

本殿は、間口七・五尺（約二・三メートル）余りの小規模な一間社流造で、屋根は檜皮葺とする。身舎は円柱を立て、四周に内法長押と切目長押を廻す。頭貫は妻側の木鼻を象鼻とし、柱上組物は連三斗で中備に蟇股を入れる。